学びと育ち研究所の役割とEBPMの必要性

学びと育ち研究所・所長
大竹文雄

研究所の役割とEBPMの推進

学びと育ち研究所データをもとに政策の効果検証

- 市長事務部局、教育委員会を始め、福祉や保健のデータを中心に整理し、データセットとして研究者に提供
- 尼崎市の教育政策の課題発見と尼崎市が重視する政策の効果検証

EBPMの推進

- 分析結果をこども・教育政策の策定に反映

現在、研究所が利用しているデータ

「住基」「あまっ子ステップ・アップ調査」「学齢期の身長・体重」「生活保護（学習支援事業含）」「就学援助」「児童扶養手当」「妊娠届」「妊婦健診」「出生時体重と分娩週数」「乳幼児健診」「幼保利用者」「出身園」「長期欠席者」

研究者の分野

- 教育経済学、発達医学、教育学、社会福祉学、教育心理学、公共経済学

データ活用のモデル

- 尼崎市は教育のデータ活用によるEBPMの先進都市として国、学会で知られている

これまでの研究所の成果

①計算科（そろばん授業）の効果測定

Journal of the Japanese and International Economies(2025)掲載

構造改革特区として「尼崎計算教育特区」の指定を受け、2004年から小学校3、4年生を対象に週1回程度の「そろばん授業」を実施。**計算科導入は算数の学力を上げる効果があったが、一方で徐々に低減**。

→　2020年度から事業見直し

②学習支援事業（対象：生活困窮者）の効果検証

市内、生活困窮所帯の児童生徒の中で勉強等の課題がある者に対して、学習支援事業として学習教室を開設し勉強や社会見学等を実施。（日本経済学会　（２０２５）で報告）

→　出席率が高い生徒には**学習時間の伸び、学力の伸びがみられた（事業成果を肯定できる内容）。**
一方で、学習支援事業が家の近くの場合には参加率が低くなることを発見

③長期欠席の理由について（予防策・解決策検討のため）

非認知能力面では外向性・協調性・勤勉性・精神安定性が低いほど長欠確率が高く、開放性が高いほど長欠確率が高い。また、生活保護世帯との関連がみられた。（行動経済学会(2024)・日本経済学会(2025)で報告）

家事都合による長期欠席は、本人の学力、性格特性は特に関係ないことがわかり、この部分においては福祉的介入により未然に防ぐことができる可能性があることがわかった。

④ 新型コロナと学力　Review of Economics of the Household(2024) 掲載

新型コロナ後、同じ学力の子どもと比較して、もともと学力が低かった子どもたちの学力低下が観察

⑤ 通塾と学力

通塾により学力が向上している可能性が高いことを検証（「日本経済研究」(2025)掲載）

Journal of The Japanese and International Economies 76 (2025) 101360

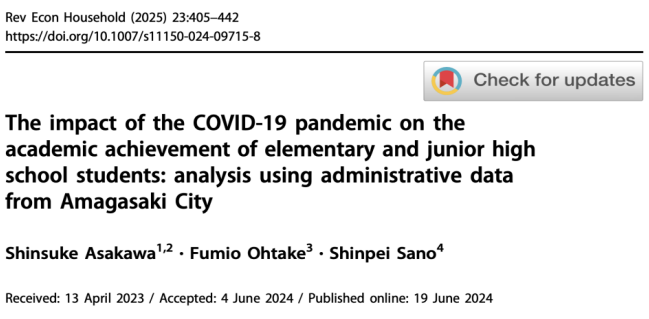
Contents lists available at ScienceDirect

Journal of The Japanese and International Economies

journal homepage: www.elsevier.com/locate/jjie

The effects of the calculation class in elementary school on student outcomes

Mayuko Abe, Fumio Ohtake, Shinpei Sano

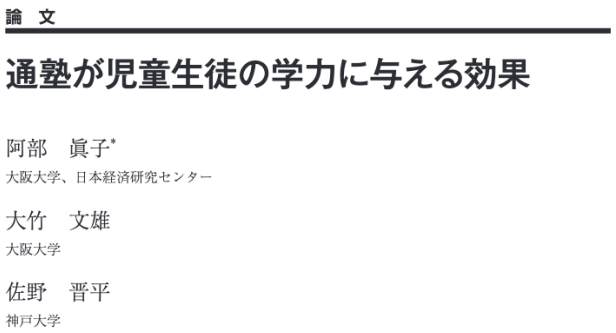

Rev Econ Household (2025) 23:405–442
https://doi.org/10.1007/s11150-024-09715-8

Check for updates

The impact of the COVID-19 pandemic on the academic achievement of elementary and junior high school students: analysis using administrative data from Amagasaki City

Shinsuke Asakawa · Fumio Ohtake · Shinpei Sano

Received: 13 April 2023 / Accepted: 4 June 2024 / Published online: 19 June 2024


論　文

通塾が児童生徒の学力に与える効果

阿部　眞子
大阪大学、日本経済研究センター

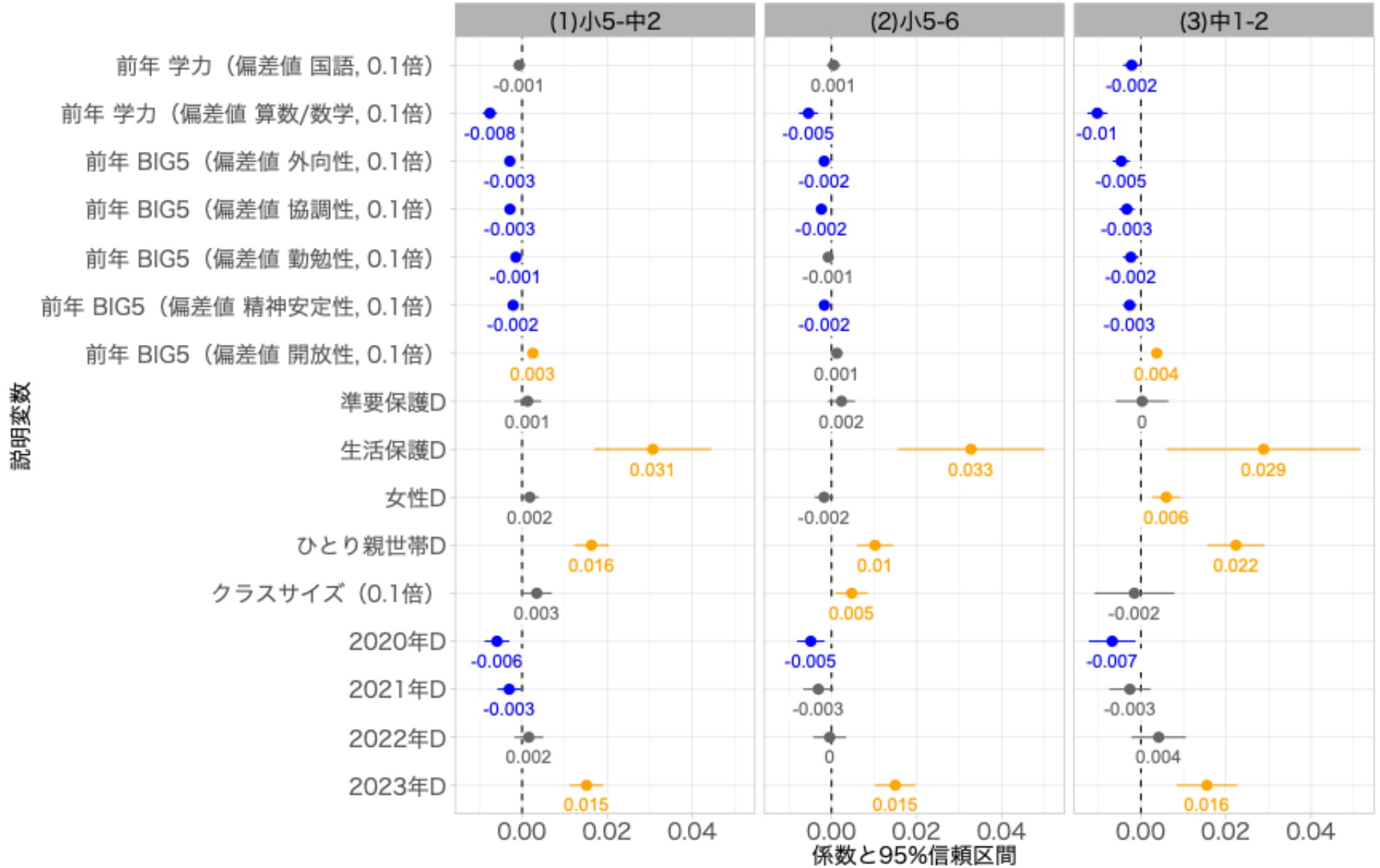
大竹　文雄
大阪大学

佐野　晋平
神戸大学

長期欠席に関する分析

- 本研究では、2019 年から2023 年までの尼崎市の公立小中学校の長期欠席の状況と、行政データおよび学力データを接合し、長期欠席と個人属性の関係を記述的に分析
- 他の要因を一定にしても、ひとり親世帯であること、生活保護世帯であること、過去の算数・数学スコアが低いことと長期欠席確率には正の相関
- 数量的な影響は生活保護世帯であることが最も大きい
- 非認知能力との関連を検討したところ、外向性、協調性、勤勉性、精神安定性が低いほど長欠確率が高く、開放性が高いほど長欠確率が高い
- これらの属性を制御しても、2019年と比べ 2023 年の長期欠席確率は高いことが観察
- 長期欠席の理由により傾向が異なる
- 長期欠席確率の経年的な上昇を Blinder-Oaxaca 分解で要因分解したところ、コロナ禍にける長期欠席の上昇は、児童生徒の属性そのものの変化よりも、属性とりわけ、学力や外向性、中学生に関しては開放性が与える影響が増大した可能性や、小学生に関してはクラスサイズの影響が示唆

長期欠席確率の決定要因（ベンチマーク、2019-2023年度サンプル）



今年度の非長欠児童生徒と長欠児童生徒の差　a 高い　a 低い　a 変わらない

注: 児童生徒ごとの2019年度から2023年度のパネル構造のデータを年・学校・学年・クラスサイズ固定効果を加えたPooled OLSで推定した。標準偏差（SE）は学級クラスターロバストSEを用いた。年度ダミーのベースラインは2019年度とした。

学習支援が小学生・中学生の認知・非認知能力に及ぼす影響

1. 児童・生徒は自分の学校区の近いところに教室があると敬遠する。

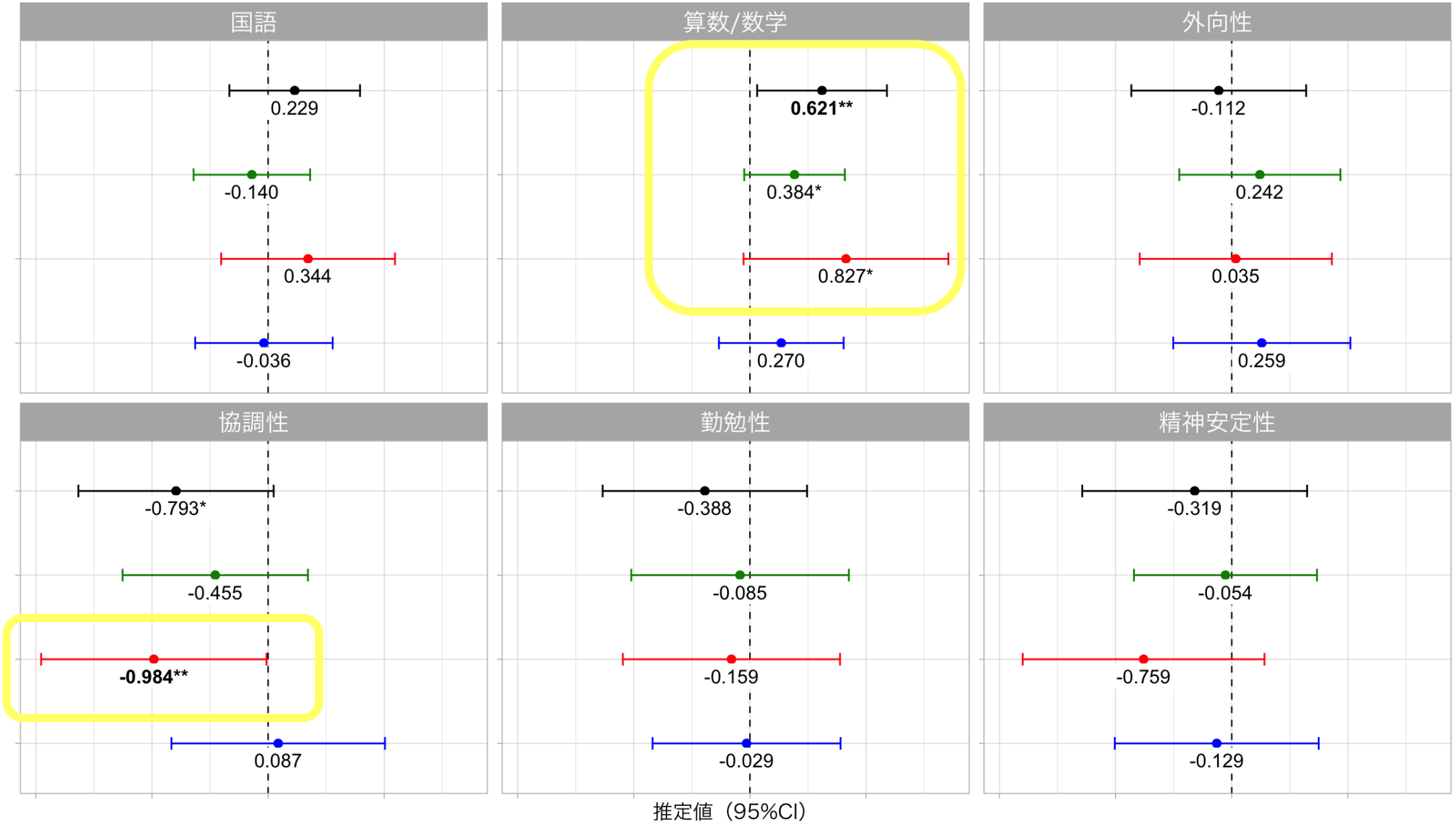
2. 学習支援の参加者全員への影響は認められず、それは参加率が低かったり、滞在時間が短い児童・生徒がいることが影響していると考えられる。

3. 女子は学習支援に参加すると国語の点数にプラスの相関がある

4. 参加率の高いあるいは参加期間の長い児童・生徒には算数/数学と勤勉性にプラスの相関が認められた。

5. その要因として学習支援に参加することにより、週に4－5時間の勉強時間の増加がみられたからである。

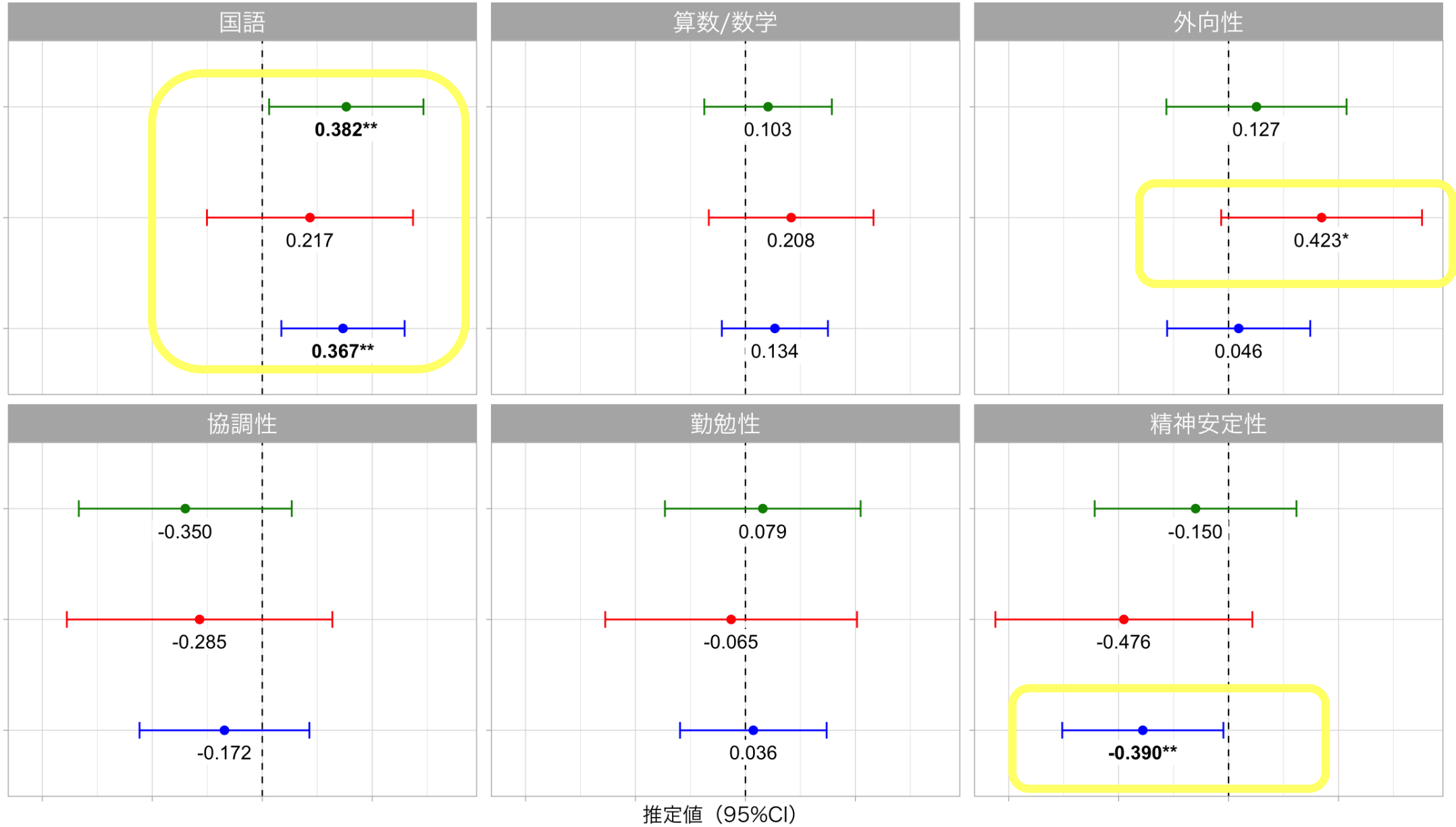
図1：ATEの係数プロット（アウトカム別）



推定グループ　参加者全員　参加率40%以上　参加期間2年以上　参加率40%以上&参加期間1年以上

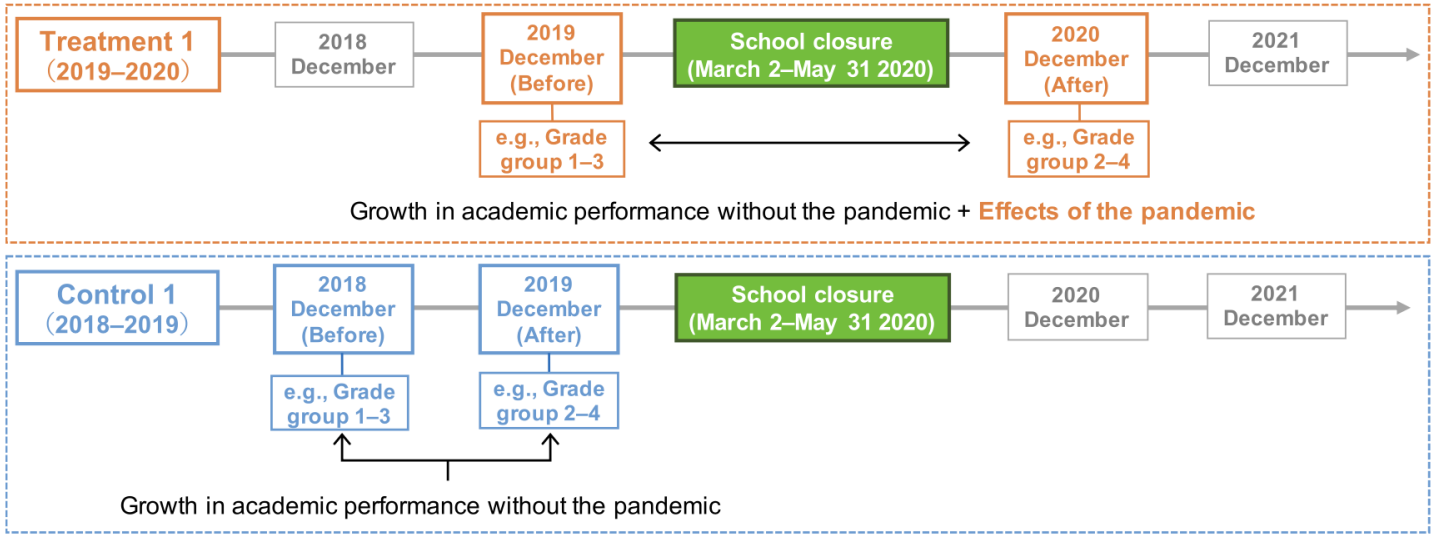
注：図中のドットは推定値を、エラーバーは95%信頼区間を示す。有意水準は * p<0.10、** p<0.05、*** p<0.01。

図2：女子ダミー×参加ダミーの係数プロット（アウトカム別）



注：図中のドットは推定値（点推定）を、エラーバーは95%信頼区間を示す。有意水準は * p<0.10、** p<0.05、*** p<0.01。

・「尼っこステップアップ調査」を活用し、コロナ前後の学力変化を分析
・コロナを経験する前と経験した後で、同じような成績の子供の変化を追跡比較して効果検証



Note: For "Before" period (test timing: treatment group 1 = December 2019, control group 1 = December 2018), we use grade groups 1–3, 4–5, 6–7. For "After" period (test timing: treatment group 1 = December 2020, control group 1 = December 2019), we use grade groups 2–4, 5–6, 7–8.

Fig. 1 Cohort and test timing for the DID analysis 7 months after school closure

Rev Econ Household (2025) 23:405–442
https://doi.org/10.1007/s11150-024-09715-8

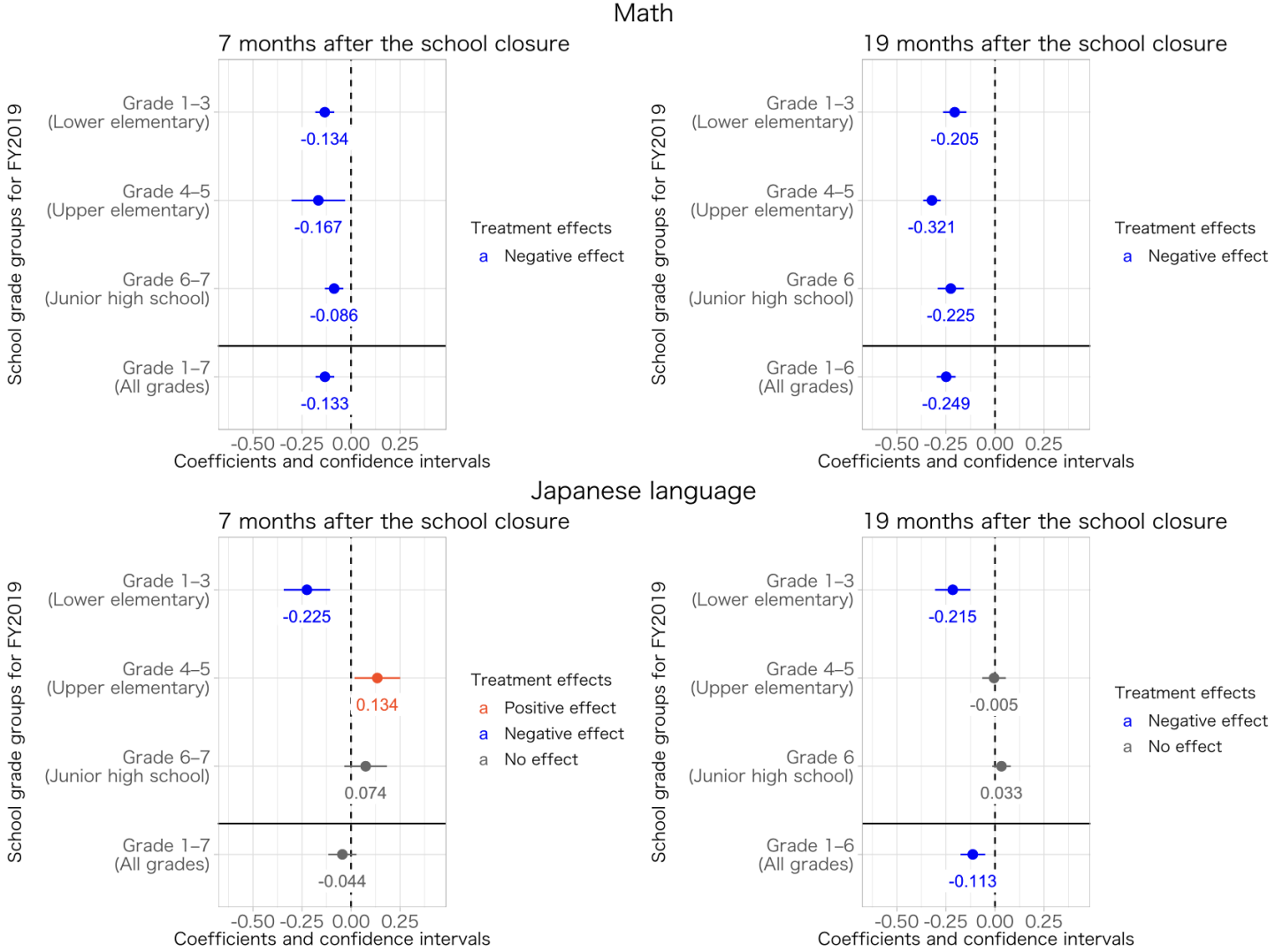
Check for updates

The impact of the COVID-19 pandemic on the academic achievement of elementary and junior high school students: analysis using administrative data from Amagasaki City

Shinsuke Asakawa[1,2] · Fumio Ohtake[3] · Shinpei Sano[4]

Received: 13 April 2023 / Accepted: 4 June 2024 / Published online: 19 June 2024

算数・数学はどの学年も成績悪化、国語は小学校低学年で悪化



Rev Econ Household (2025) 23:405–442
https://doi.org/10.1007/s11150-024-09715-8

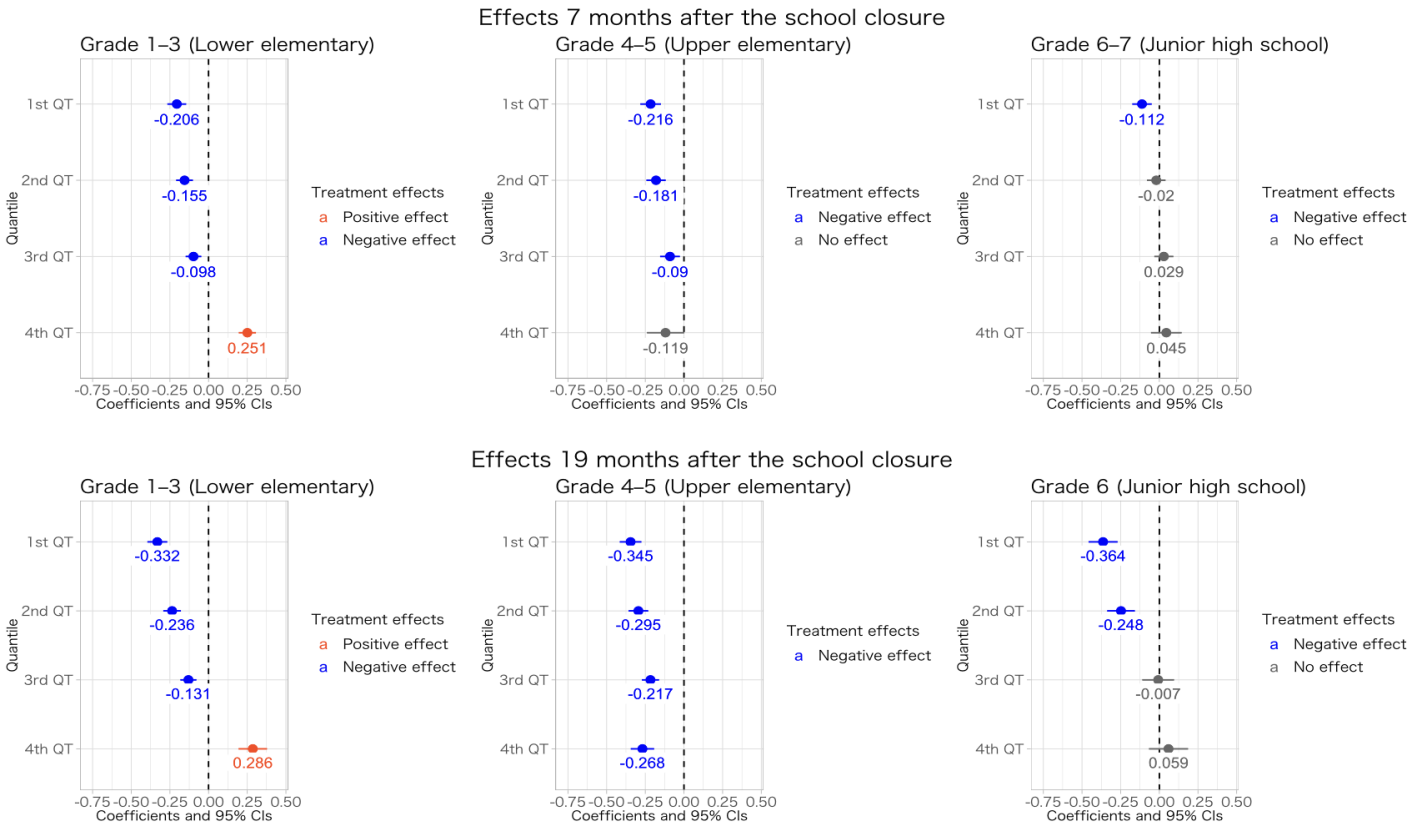
Check for updates

The impact of the COVID-19 pandemic on the academic achievement of elementary and junior high school students: analysis using administrative data from Amagasaki City

Shinsuke Asakawa[1,2] · Fumio Ohtake[3] · Shinpei Sano[4]

Received: 13 April 2023 / Accepted: 4 June 2024 / Published online: 19 June 2024
© The Author(s) 2024

算数数学の成績悪化はもともと学力が低かったグループでより大きい



Note: Quartiles were calculated based on 5-95 percentile samples of math for each grade group and cohort. The upper and lower panels of the figure show ATT by quartile for the three grade groups 7 and 19 months after school closure, respectively. In estimating the impacts at 19 months after the school closure, the effects of COVID-19 pandemic are included between FY2019 and FY2020 for control group C2 (Grade groups 1–3, 4–5, and 6 in FY2018). Therefore, by adding back the differences between the FY2019 to FY2020 growth of treatment group T1 (Grade groups 2–4, 5–6, and 7 in FY2019) and the FY2018 to FY2019 growth of control group C1 (Grade groups 2–4, 5–6, and 7 in FY2018) for each quartile, the impacts of COVID-19 pandemic on the control group C2 are removed. The standard errors in the estimates are based on nonparametric bootstrap with 300 replications.

Fig. 4 Quantile-DID results: Math

Rev Econ Household (2025) 23:405–442
https://doi.org/10.1007/s11150-024-09715-8

Check for updates

The impact of the COVID-19 pandemic on the academic achievement of elementary and junior high school students: analysis using administrative data from Amagasaki City

Shinsuke Asakawa[1,2] · Fumio Ohtake[3] · Shinpei Sano[4]

Received: 13 April 2023 / Accepted: 4 June 2024 / Published online: 19 June 2024
© The Author(s) 2024